

ライティングサポートデスクにおけるセッションの工夫

——アクション・リサーチによる補助教材作成および活用を例として——

勢力 麻未
SEIRIKI Mami

1. はじめに

2020年度より愛知淑徳大学ライティングサポートデスク（以下、WSD）では、「ライティング補助教材」の作成^(注1)およびMicrosoft Teamsを活用した学内限定公開を開始した。「ライティング補助教材」のコンセプトは、日々の相談業務から垣間見える学生の文章作成の“ちょっとした困りごと”をサポートすることである。学生自身が文章作成時に活用することはもちろん、WSDの個別相談（以下、セッション）でも使用することを見越している。

本学WSDでは、例年1000件を超えるセッション数があるが、2021年度は1327件であった。そのうち、筆者が担当したものは266件である。なかでも、「ライティング補助教材」を活用したセッションは24件あり、筆者のセッションにおける活用率は約9%であった。WSDのセッション全体における「ライティング補助教材」の活用率が34%であったことから、筆者の活用率の高さが分かる。では、「ライティング補助教材」をセッションの中で活用するメリットは何か。

本稿では、筆者が作成した「ライティング補助教材」のうち、「文章の『型』」を活用したセッションを例として、セッションの中で「ライティング補助教材」を活用することで、相談者が抱える本来の「つまずき」に対する理解を促し納得させる効果が期待できることを述べる。加えて、セッションが円滑に進むことで相談者は当初の目標よりも一歩先の修正等までできる可能性を指摘する。

2. 「ライティング補助教材」を使用する背景

2021年度に筆者が担当した相談は266件であったが、その内訳は、日本語表現^(注2)の相談が165件、日本語表現以外の授業レポートが38件、志望理由・自己PR文等が27件、卒業論文が25件、手紙文が3件、プレゼン資料が2件、コンテスト用書類が1件、その他が10件であった。最も多い相談は日本語表現の授業レポートやプレゼン資料に関わるものであるため、ある程度相談内容や指摘内容の傾向が類似することは想像に難くないだろう。しかし、それ以外の相談も「つまずき」の傾向は似ている。例えば、レポートにおいては引用の作法の問

題や目標規定の不足、問いと結論の不一致、分析の不足等が挙げられる。また志望理由・自己PR文等でも、主張と裏付けの関連が薄かったり、エピソードの絞り込みが甘かったりと、文章の内容は異なるものの、セッション担当者が感じる相談者の「つまずき」は同一傾向にある。

しかし、セッション担当者が感じる相談者の「つまずき」は必ずしも相談者本人が感じている「つまずき」と一致するわけではない。外山（2018）は、本学WSD利用者の「つまずき」の傾向とそれに対するアドバイザーの指摘を分析し、約半数以上の相談において、相談者本人の「つまずき」とセッション担当者の認識する相談者の「つまずき」に齟齬があることを指摘している。加えて、セッション担当者が指摘する相談者の「つまずき」は、ライティングプロセスにおいて相談者自身が認識する「つまずき」よりも前段階のものが大半であることも明らかにしている。実際に筆者が担当した相談でもこのような認識の齟齬は多々あり、その大半で相談者本人が想定していたよりも前段階のライティングプロセスに「つまずき」がある。このような場合、言葉による説明のみでは相談者に自身が抱える本来の「つまずき」を理解させ納得させることは困難である。加えて、本学WSDは30分という限られた時間の中でセッションを行っているため、相談者が本来の「つまずき」を納得したところでセッション終了時間となるということもあり得る。

また、セッション担当者の負担という点に着目すると、「つまずき」に対する認識の齟齬があった場合、担当者には相談者が本来の「つまずき」を納得できるような伝え方が求められる。そこには言葉選びの配慮等デリケートなものも含まれるため、セッション担当者の負担は大きい。

そこで、筆者は2020年度より「ライティング補助教材」を使用しながら相談者が抱える本来の「つまずき」を指摘することを試みている。相談者は、ライティング補助教材という根拠資料に基づいて本来の「つまずき」を指摘されることで、納得しやすい傾向にあることが分かった。加えて、根拠資料があることで説明も短時間で済み、言葉選びの配慮も最小限にとどめることができた。つまり、セッション担当者としての負担も減ったと言える。

また、相談者が本来の「つまずき」を納得するまでの時間が短縮されたことで、「つまずき」を解消するためのセッションにも時間が割けるようになった。

次章では、筆者が作成した「ライティング補助教材」のうち「文章の『型』」を活用したセッションの事例を取り上げ、その効果を報告する。

3. ライティング補助教材を活用したセッション事例

3.1 ライティング補助教材「文章の『型』」

本稿で取り上げるライティング補助教材「文章の『型』」は、山口（2019）の書籍を参考に作成^(注3)しており、「結論優先型」「列挙型」「ストーリー型」の3つの型を「こんな時に使える」という筆者オリジナルの場面設定付きで紹介している。この「こんな時に使える」という場面は、WSDに持ち込まれる相談を参考にしており、本学在学時の使用場面を想定している。例えば「結論優先型」では、「『〇〇についてあなたの考えを述べなさい』のようなテーマ論証型レポート」、「小論文」、「卒業論文」、「履歴書・エントリーシート」の自己PR・志望動機（動機が1つの場合）」といった場面を提示している。また、本学卒業後も「文章の『型』」が活用可能であることを示すために、筆者の社会人生活を参考にした「社会人の使用場面例」も掲載した。

本教材を作成する契機となったのは、日々の相談業務の中で、課題に適した文章構成を考えたり主張を効果的に伝えたりすることを苦手とする学生を多々目にしたことによるものが大きい。実際に本年度筆者が担当したセッションの中で「課題に適した文章構成」「主張を効果的に伝える構成」に関する相談は54件と、筆者が担当したセッションの中でも最も多い相談であった（全体の約20%を占める）。つまり、文章作成中の学生にとって「構成」に関する不安や疑問は、つまずきやすいライティングプロセスの1つであると言えるのではないかと。

以上のように、本学の学生が文章作成中に自覚する「つまずき」の1つとして「文章構成に対する不安」が特徴として挙げられたため、ライティング補助教材「文章の『型』」を作成するに至った。

3.2 ライティング補助教材「文章の『型』」を活用したセッション

筆者のライティング補助教材の活用率が全スタッフの中で最も高いということは先に言及したが、中でも前節で述べたとおり、「文章構成に対する不安」は本年度担当したセッションの中で最も多かったためか、ライティング補助教材の中でも「文章の『型』」を活用したセッションが最多であった。ライティング補助教材を活用した27件のセッションのうち、15件で「文章の『型』」を使

用し、うち13件が志望理由・自己PR文の相談であった。その13件の相談のうち、構想段階の相談で活用した事例が7件、文章作成中の相談で活用した事例が4件、ほぼ完成した段階で活用した事例は2件であった。

構想段階の相談では、「文章の『型』」で紹介している3つの「型」のうち、どの「型」に当てはめると読み手に伝わりやすいかを補助教材を見せながら相談者と一緒に確認している。そのうえで、実際に「型」に沿ってアウトラインを作成していくというセッションを行っている。

一方、作成中・ほぼ完成段階の相談では、相談者の本来の「つまずき」を説明するための根拠資料として活用している。具体的には、相談に持ち込まれた文章と「型」とを比較し、欠落箇所を示すことで、相談者が抱える本来の「つまずき」への理解の促しに役立てている。いわゆる、文章の軌道修正に活用しているということである。

このように、同じライティング補助教材でも、相談者の執筆状況に応じて活用方法を変えている。ただし、セッション担当者の負担という点に着目すれば、文章の軌道修正が必要なセッションの場合、たとえライティング補助教材を使用していても言葉選びの配慮は必要となるため、負担は大きくなる。では、ライティング補助教材「文章の『型』」を軌道修正のための根拠として活用する場合、どのようにセッションを進めているのか。次節では実際のセッションでの活用例を紹介する。

3.3 ライティング補助教材「文章の『型』」を活用したセッション事例

本節では、実際に筆者がライティング補助教材「文章の『型』」を活用し、文章の軌道修正を行ったセッション事例を紹介する。

課題内容	「日中大学生スピーチ交流会」参加にあたっての志望動機（300～400字）
進行状況	作成中
相談内容	説得力のある文章とは感じられない。どのように説得力を出せば良いか。
指導内容	現立志望した理由が文章の真ん中あたりに書かれており、何が言いたいことなのか分かりにくい→補助教材「文章の『型』」より「列挙型」で文章を書くことを提案。「私がこのイベントに応募した理由は2つある。1つ目は～。2つ目は～。以上2つの理由より・・・」の型に当てはめて修正することにした。また、現状の文章には志望動機ではなく、イベント参加後の抱負のような文章も書かれているため、課題から外れている可能性を指摘。

表1 指導履歴記載事項（一部抜粋）

表1は、志望理由についての指導記録の一部である。また、この事例の相談者は「説得力のある文章とは感じられない」からと「作成中」と申告していたが、文章をすべて書ききった状態で個別相談を利用していた。実際に文章を確認した筆者の所感として、相談者の「つまずき」を「現状志望した理由が文章の真ん中あたりに書かれており、何が言いたいことなのかが分かりにくい」と構成に原因があると判断している。つまり、書きたい内容が決定したところで構成を考えることなく相談者が執筆をはじめたことで、説得力のない文章となったことが推察される。加えて、「現状の文章には志望動機ではなく、イベント参加後の抱負のような文章も書かれている」ことから、相談者が課題に適した文章構成の重要性を理解できていない可能性も伺える。よって、文章の軌道修正が必要であると判断し、筆者の行ったアプローチは書き手がイベントに参加したい理由の明確化である。その結果、2つ理由が明らかとなったため、補助教材「文章の『型』」の中でも列挙型に当てはめて書くことを提案している。なお、これ以降の指摘は紙幅の都合で省略したが、イベントに参加したい理由の詳細となる具体的な内容のみならず、まとめ部分の書き方にまで言及していた。つまり、「ライティング補助教材」を指摘の際に活用したことで、相談者が自身の「つまずき」の原因を可視化でき、納得しやすかったのではないかと考える。加えて、自身の主張に適した「型」が示されていたことで、セッション中に相談者自身でスムーズに具体的な内容の修正まで可能だったのではないか。このように、スムーズにセッションが進んだ結果、当初の相談内容には含まれていなかったまとめ部分の書き方にまで修正が及んでいる。また、スムーズにセッションが進んでいるということは、セッション担当者としての負担も大きくないことが推察されるだろう。

4. おわりに—ライティング補助教材を活用したセッションの工夫—

本稿では、筆者が作成した「ライティング補助教材」のうち、「文章の『型』」を活用したセッション事例を取り上げ分析した。セッションの中で「ライティング補助教材」を活用することで、相談者が抱える本来の「つまずき」に対する理解を促し納得させる効果が期待できる。また、「文章の『型』」に限っては、見本となる「型」が可視化されていることで、相談者が修正案を考えやすくよりセッションが円滑に進む。そのため、相談者は当初の目標よりも一歩先の修正までできるようだ。

また、セッション担当者としての負担感も「ライティング補助教材」を使用することで軽減される。筆者は2020年度よりセッションの中で「ライティング補助教材」を活用してきたが、相談者本人の感じる「つまずき」

とセッション担当者の認識する相談者の「つまずき」に齟齬がある場合であっても、「ライティング補助教材」を活用することで、大きな負担感なく指摘できるようになった。筆者が作成した「ライティング補助教材」以外にも同様の効果を感じられていることから、「ライティング補助教材」が相談者の抱える本来の「つまずき」を示すための根拠資料となり得るという性質を持つためだと推察される。

一方で、本稿では筆者の対応したセッションおよび特定の「ライティング補助教材」のみで分析を行っているため、他のスタッフ（特に学生スタッフ）や「ライティング補助教材」でも筆者と同様の効果が得られるのかまで言及できていない。今後は分析の対象や範囲を他の「ライティング補助教材」や学生スタッフを含めた全スタッフにまで広げるためにも、「ライティング補助教材」の活用率が高いスタッフがセッションでの活用方法を共有していくことも必要だろう。「ライティング補助教材」の活用率を全体的に底上げしたうえで、改めて効果を検証し、相談者にとってより効果的な支援の方法を模索していきたい。

注

- 1 『愛知淑徳大学初年次教育年報』第6号（2021年5月発行）「2020年度『ライティング（WSD）』活動報告」の「5.6 ライティング補助教材の作成」にはライティング補助教材のコンセプトと目次一覧を掲載している。また、本誌「2021年度『ライティンサポートデスク（WSD）』活動報告」「5.7.1 ライティング補助教材の作成」も参照。
- 2 初年次生対象の「日本語表現 T1」（1年前期／全学必修授業）と後続の「日本語表現 T2」（1年後期／学部単位で必修または選択授業）の相談の合算。
- 3 山口拓朗（2019）『世界一ラクにスラスラ書ける文章講座』かんき出版で紹介されている3つの「型」のテンプレートを参考にしている。「結論優先型」は「結論」→「理由・根拠」→「具体例・詳細」→「まとめ」という構成である。「列挙型」は「全体像」→「列挙ポイント①」→「列挙ポイント②」→「列挙ポイント③」→「まとめ」という構成である。「ストーリー型」は「マイナス」→「転機」→「進化・成長」→「明るい未来」という構成である。